

言語表現と認知機序との間隙

佐良木 昌

Saraki Masashi

明治大学

Meiji University

saraki@st.rim.or.jp

概要

人の認知過程では、「いま・ここ」という感覚的確信は意識において前提されている。しかし、何事かを言い表そうとする表現意識の下では、発話時や文起草の際、表現すべき意識内容、例えば伝達すべき情報、その配列機序が表現主体の母語の構造によって規定されることがある。例えば、英語の基本文型においては、主語—述語から発話や文が起こされることからして、行為主体・行為・行為対象の表現(SVO)が文頭に位置することになる。対照的に日本語では述語が文末に位置し、しかも主語が明示されない場合もあり、述語用言に係る連用句(いつ・どこで)が文頭に立ち易い。例えば、英語では Who>What>Where>When>Why の順が、日本語では、いつ>どこで>だれが>なにを>なぜの順が、一般的と思われる。このように、発話や叙述において、5Ws の情報配列に関する慣習が、異なる言語の使用者で異なっている。この相違について無反省のまま、訳文において原文の情報配列を替えてしまうといった傾向が認められる。本稿で検討する課題は、翻訳者自身の認知と叙述、それぞれの機序にしたがって原文の情報配列を替えてしまう、換言すれば、原文の情報配列を翻訳文において変更することの是非を問うことである。

1. 言語間 5Ws の差異

1.1. ウィキペディア

ここでは、ウィキペディアの各国版を照合してみる。英語版の記事 “Five Ws” [1] では、以下の順である。

- 1) Who was involved? 2) What happened?
- 3) Where did it take place? 4) When did it take place?
- 5) Why did that happen?

ドイツ語版の medien Wiki/ W-Fragen[2]によれば、ジャーナリズム文書においては、英語の配列と同じく下記の配列 [2] が観察される。

Journalistische Darstellungsformen beantworten in der Regel die folgenden Fragen:

- 1) Wer ist beteiligt? 2) Was ist geschehen?
- 3) Wo? 4) Wann?

5) Wie (Einzelheiten)? Warum? Woher stammt die Information (Quelle)?.

<https://www.medienwiki.org/index.php/W-Fragen/> (Accessed on 28.12.2018)

日本語版の記事 「5W1H」 [3] では、「

When (いつ) Where (どこで)

Who (誰が) What (何を)

Why (なぜ) をしたのか？」であり、英語版とは配列が異なっている。なお英語版 Wikipedia には、“Just So Stories/The Elephant's Child.” 1902 からの引用として、Their names are What and Why and When And How and Where and Who. が参照されているが、前記の英語版配列とは異なっている。

1.2. 叙述の機序

前項における 5Ws は単文を想定していると推定されるが、主節・従節の構成を備える複文については、日本語文では「なぜ」の従節が文頭に位置する傾向が顕著である。この日本語の特徴を踏まえて、複文の叙述について日英間の対照を以下試みる。

最初に、米国における作文指導を瞥見しよう。具体的な事柄を概括する語、または上位の概念を表わす語を用いて概念を先に述べ、次に具体的な事柄を記述する。こうすると左から右へと文章の流れに沿って筆者の認識内容を、読者が理解しやすい。数学論文指導のテキスト “Mathematical Writing” のなかで、Knuth は学生文書の添削例を示して語っている[4]。

“Try to make sentences easily comprehensible from left to right. For example, It would be better to write. We prove that <grunt> and <snort> implies <blah>. We prove that two conditions <grunt> and <snort> imply <blah>. Otherwise it seems at first that <grunt> and <snort> are being proved.”

また、長い主語は避け、キーワードを先頭に出し短くまとめるようにと、指導している例では、

× An important method for internal sorting is quick-sort.

○ Quick-sort is an important method for internal sorting, because ...

× A commonly used data structure is the priority queue.

○ Priority queues are significant components of the data

structures needed for many different applications.

学生文章の例では、まず具体的な事柄(<grunt> and <snort>)を述べる傾向が観て取れる。Knuth先生の添削では、具縦的な事柄を整理一括して上位概念で表している。Knuthは、まずは読者に伝えたい事柄を一言で表す概念から文を起こすことを勧めている。文冒頭のSVOにおいて、筆者の考えなり判断なりが端的に示されていることから、読者は筆者の考えの大枠をつかむことができる。続いて、その後の詳細な内容展開についていける。このことを、Knuthは、“easily comprehensible from left to right”として表現している。続いて、その後の詳細な内容展開についていける。このことを、Knuthは、“easily comprehensible from left to right”として表現している。ただ、英語母語の学生であっても、クヌースが書き直した文(○)のように書くことは、大変なことのようだ。演繹的な文体が体得されるのは、レトリックあるいはテクニカルライティングのコースによる教育訓練によるもので、英語という言語の固有の性格によるものとは言えない。また、米国の大学教科書では、“a major idea”は主節で述べ、“subordinate ideas of lesser importance”は従節で述べると指導している。[5]

SUBORDINATE IDEAS OF LESSER IMPORTANCE

Expressing something in a subordinate construction usually implies that it has less significance than what appears in the main clause. It is a mistake, then, to use a main clause or a separate sentence for an idea to which the context assigns minor importance.
.....

DO NOT SUBORDINATE IDEAS OF PRIMARY IMPORTANCE

Subordinating a major idea is the opposite error to not subordinating a minor one.

以上の叙述に対する教育観点からすると、訓練された英語の叙述傾向とは概括から具体的詳細への展開であることが理解できる。たとえば、文冒頭の主語に直属する動詞・目的語から、これに続く関係代名詞節や従属接続詞節への流れが大勢であると理解できる。従って、5Wsの配列が、who>what>where>when>why となることも分かるのである[6]。

一方、日本語の文章展開は、具体的事柄を先に述べ、文の締めくくりとして命題を説き判断辞で締めくくる。英語の演繹的叙述とは逆の展開になっている。この点、英語学習者の英作文において、理由を先ず述べ結論は後にするといった傾向への影響が窺われる。すなわち、「日本人の中学・高校の学習者においては、それぞれ7割以上、6割以上の文が because を文頭で使用しているのに対し、英語母語話者では文頭に because を使用する例は、BROWN, LOB 共に1割に満たないという、非常に対照的な結果である」[7]。

上記の傾向は本稿筆者の調査とも符合する(以下に表

を引く)[6]。

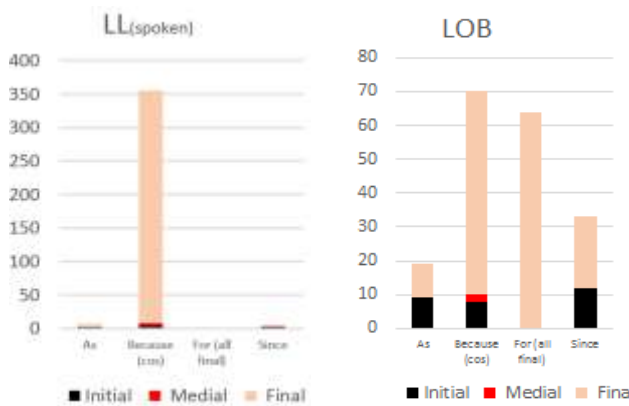
表 従属接続詞の文頭出現頻度 “Time Almanac 1995” CD-ROM

接続詞	出現数	出現率	文頭	文頭率
If	79408	55.4%	9696	12.2%
When	29992	20.9%	9892	33.0%
While	12643	8.8%	3781	29.9%
Because*	9922	6.9%	1229	12.4%
Though†	6659	4.6%	2666	40.0%
Although†	3369	2.4%	2080	61.7%
Unless	1329	0.9%	264	19.9%

* Because of/ because of =10.5% † Although(Time では Though も)が文頭に出現する率が例外的に多い。

上記の統計的傾向では、主節先行(判断・結論)で従属節後続(因由・条件)というのが大勢である。

A Comprehensive Grammar of English Language (CGEと略称する)[9]における LOB コーパスの調査結果でも、because の出現位置は後続位置が圧倒的であるが、as, since の方は先行／後続の間に大きな差はない。



図： LOB 調査の従属接続詞出現位置 Based on Table 15.47, p. 1107 in CGE

2. 5Ws の和訳

事態認知、情報の優先順位、叙述の配列という三つの機序があり、区別する必要がある。翻訳においては、5Wsの配列に関わりなく概要が伝わればよいといった実際の要請の下では、配列が変わっても問題がないかもしれない。しかし、事実の伝え方が問題になるときには、どの情報が重要かという力点の置き方という原文の問題意識を正しく伝えなければならない。そのときには、原文の配列順を尊重しなければならない。例えば、英日翻訳において無意識に英語の情報配列を日本語の配列に変えてしまうといったことが起こるからである。逆に日本語作品の英訳において、日本語の叙述順序を、英文秩序に改変してしまうといったことも起こる。

ここで、米ジャーナリズムの作文指導テキストを例に和訳上の問題を検討してみる[10]。

The lead, whether it consist of one paragraph or more

(the bank story has two), is the unit of a news story. It must contain the who or what element as well as where and when, at least in simple form to be elaborated upon later in the story if necessary. This enables the lead to stand on its own in a sense.

In the bank story the essential elements are as follows:

WHO—three masked and armed men.

WHAT—robbed a bank and shot a teller.

WHERE—First National Bank (abbr.)

WHEN—about 10 A. M. Tuesday

W. K. Agee, P. H. Ault, and E. Emery 1983: 38

上記引用の英文の情報配列は who>what>where>when の順であるが、これを翻訳において「いつ」「どこで」「だれが」「何をした」が最も重要である[11]と改編することは、妥当性を欠く。翻訳者自身の認知と叙述との機序にしたがって原文の情報を配列替えしてしまうならば、原文の機序と乖離してしまうのである。こうした違いがあるため、翻訳文において、情報配列を原文準拠とするか、目標言語の配列順に転換するか、いずれかの判断が要る。その判断根拠と翻訳技法とを明確にすることが求められる。

3. 事例研究：日本語従節の英訳

ここで、ネイティブの翻訳者トム・ガリー氏の見解を聞こう。以下、ガリー氏の『英語で楽しむ寺田寅彦』から引用する（丸囲み番号および下線は引用者によるもの）。

「①百貨店のひどく込み合う時刻に、第一階の昇降機入り口におおぜい詰めかけて待っている。②昇降箱が到着して扉とびらが開くと先を争って押し合いへし合いながら乗り込む。そうして③それが二階へ来ると、もうさっさと出てしまう人が時々ある。④出るときにはやはりすしづめの人々を押し分けて出なければならないのである。

このエッセーを翻訳しはじめたときに、最初の部分を①When ②When ③When ④When と仮にした。数日後、それを読み返したらすべてのセンテンスが When で始まることに気がついた。第1章「藤の実」でも書いたように、同じ単語を繰り返すことでそれを指すことを強調できるが、ここでは When を強調する必要がないので、最終版では When を一回のみにしたその他にもこの部分でいろいろ変えた。作文にも翻訳にも、絶えざる推敲が必須なのだ。」[12]

First draft

“①When a department store is very crowded, a throng of people will be waiting at the elevators on the first floor. ②When an elevator arrives and the door opens, the people in the crowd push and shove

to try to board first. ③When the elevator reaches the second floor, sometimes some passengers will already get off. ④When they do so, they have to push through the crush of other passengers.”

Final draft

“①In a crowded department store, a throng of people wait at the elevators on the first floor. ②An elevator arrives, the door opens, and the crowd pushes and shoves into it, each trying to board first. ③When the elevator reaches the second floor, some passengers might already rush to get off, forcing their way through the crush of bodies. ④One might think that, if they wanted to go up only one floor, they could have done so using their own legs without having to depend on a jam-packed elevators.”

最初の翻訳では、原文の叙述順序にしたがっている。ガリー氏は When で始まる文章が繰り返されていることに気づき、この反復はガリー氏の意図しない強調になっていると考えた。そこで、最初の翻訳を、反省し考えを整理しながら翻訳文を見直した。その推敲過程で叙述が整理された。こうした労苦の過程を経て、堅固な構造を備えた英文が作られる。ガリー氏は云う。「作文にも翻訳にも、絶えざる推敲が必須なのだ。」寅彦の叙述は、「・・・すると、～」という順序が、最初の訳文では”When・・・, ～であったものが、最終訳文では大略以下のように改定されている。

- ①In a crowded department store という場所の指定に、When 節「時点」から変わっている
- ②・・・, and ～という事態推移の表現に変わっている
- ③When-clause 変更なしだが分詞構文を追加
- ④「すしづめ」という比喻を jam-packed と工夫している

推敲課程では、最初の原文の意味解釈、すなわち原文が表している事態についてのガリー氏の認識も変わったのではないかと推察するからである：

- ①時の認知が場所の認定に変更されている
- ②事の起こりのタイミングが原文及び初訳では表現されているが、最終訳文では事態の推移（あるいは and が因果性を含む表現ならば事態の連動）として動的に表現されている
- ③原文③の説明不足を補って forcing 以下の分詞構文の説明を追加して、④への繋ぎを準備している
- ④混んだエレベータから出る人の状態を、③との脈絡が分かるようにしている

以上の引用箇所においては、訳文の叙述過程は、ほぼ原文と同じである。

4. 若干の考察

一方、少し後の箇所 (pp. 22-23) では、「・・・に立って、～を見ていると一つの顕著な事実に気が付く」の訳文は、原文の主語なしのためか、人一般のこととしての表現であり One notices ～ when standing・・・ and observingへと叙述過程が主節・従節へと前後入れ替わっている。寅彦は「見る→気が付く」というに現実過程＝認知過程として表現しているが、訳文では認識結果から文をおこしているため、認識結果から遡及する形で現実過程を表現している。だから、認知過程とは切り離された理論的記述となっている。したがって、「見ている」という知覚的表現が「観察している observing」という理論的表現になっている。こうしたところには訳者の事態の捉え返しという認知作用があるかもしれない。

あるいは、科学者寅彦という点を考えて科学者なら観察的に事態を観ているだろうという推定が働いているかもしれない。実際、寅彦の当該段落は科学的分析的説明である。そのため、寅彦が観察結果を報告する段落としてガリー氏が捉えたとも言える。この認識に立てば事態の報告という叙述方式ではなく観察結果の報告に適した叙述方式が適切という判断になるだろう。約言すれば、翻訳過程において、訳者が、母語で、原文段落が表す事態を捉え返すという過程があり、当該パラグラフの性格に応じて翻訳文の叙述方式を選ぶだろう。このような翻訳における認知と叙述との相関関係について、論議を深めることが期待される。

謝辞

本稿は、日本学術振興会の科学研究費助成事業の「基盤研究(C)」(課題番号 21K00744)「高度翻訳知識に基づく翻訳文法の構築に関する研究」および「基盤研究(C)」(課題番号 18K11849「ネット社会におけるインバウンド観光客・定住者を意識した文化伝達の言語表現」)による支援を受けている。

参考文献

- [1] https://en.wikipedia.org/wiki/Five_Ws/ (Accessed on 28.12.2018)
- [2] <https://www.medienwiki.org/index.php/W-Fragen/> (Accessed on 28.12.2018)
- [3] <https://ja.wikipedia.org/wiki/5W1H/> (Accessed on 28.12.2018)
- [4] クヌース, クヌース先生のドキュメント纂法, 有澤誠訳, 共立出版, 1989,
http://jmlr.csail.mit.edu/reviewing-papers/knuth_mathematical_writing.pdf browsed in july/2021
- [5] Kane, Thomas S, The Oxford Guide to Writing: A Rhetoric and Handbook for College Students” Oxford University Press, pp.219-220, 1983
- [6] 佐良木昌, 認知機序と5W表現順序との言語間相違, 電子情報通信学会総合大会基礎・境界ソサイ

エティ一般セッション, 2019

- [7] 立川研一「日本人初級英語学習者の Writing における 'because' の使用傾向」大分大学教育学部研究紀要 41 巻 2 号 301-312 2020
- [8] 佐良木昌・宮澤織枝「従属接続詞による英語因由表現の諸相」信学技報 118(516), 65-70, 2019-03-18
- [9] Quirk, R, et.al, A Comprehensive Grammar of the English Language
- [10] W. K. Agee, P. H. Ault, and E. Emery, Reporting and Writing the News, pp.35-41, Harpper & Row, New York, 1983
- [11] 神門典子「認識特性に基づくテキスト構造の分析：日英新聞記事を例として」学術情報センター紀要第 8 号, p.111, pp.107-129, 1996
- [12] トム・ガリー, 英語で楽しむ寺田寅彦, 18-19, 岩波書店, 2013